

新津市誕生 10 周年記念特別展覧会 記録集

津の宝物が大集合！
新津市誕生10周年記念特別展覧会



1 章 津のルーツ（旧石器・縄文・弥生・古墳時代）

明治15年（1882）、菟芸郡林村（津市芸濃町）付近から約430～300万年前に生息していた太古のゾウの化石が発見されました。このゾウは最初に三重県で発見されたことから「ミエゾウ」と名付けられました。

さて、わたしたちの祖先「ヒト」の歴史に目を向けてみましょう。三重県のほぼ中央部に位置する津市では、伊勢湾へと注ぐ安濃川と雲出川を中心に、旧石器時代から連綿と人々の生活が営まれてきました。

地中に長く埋もれていた当時の人々の暮らしも、発掘調査などによって少しずつ明らかになってきています。この章では遺跡からの出土品で津の歴史をたどります。



<展示資料>

No.1－1

ミエゾウ 鮮新世 北黒田標本（津市河芸町北黒田） 三重県総合博物館蔵

No.1－2

ミエゾウ 鮮新世

明標本（複製） 鮮新世 三重県総合博物館蔵（原資料 国立科学博物館）

No. 2

ナイフ形石器 四ツ野B遺跡（津市高茶屋小森町）旧石器時代 個人蔵
手に持って切ったり、削ったり、木の柄の先につけて突いたりして使ったと考えられています。

No. 3

尖頭器 東浦遺跡（津市大里野田町）旧石器～縄文時代草創期
三重県埋蔵文化財センター蔵
柄の先につけて槍として使いました。

No. 4

押型文土器 西出遺跡（津市美里町）縄文時代早期
三重県埋蔵文化財センター蔵
刻み目をつけた棒を押し付けたり、回転させて文様をつけています。

No. 5

双耳壺 雲林院青木遺跡（津市芸濃町）縄文時代中期 津市蔵



No. 6

深鉢・鉢 大石遺跡（津市芸濃町）縄文時代中期 三重県埋蔵文化財センター蔵

No. 7

深鉢 蔵田遺跡（津市安東町） 縄文時代後期 三重県埋蔵文化財センター蔵

No. 8

深鉢 四ツ野B遺跡（津市高茶屋小森町） 縄文時代晩期 津市蔵

No. 9

弥生土器 納所遺跡（津市納所町） 弥生時代（前期～中期）
三重県埋蔵文化財センター蔵

No. 1 0

木製品 納所遺跡（津市納所町） 弥生時代 三重県埋蔵文化財センター蔵

No. 1 1

木製鋤 松ノ木遺跡（津市安東町） 弥生時代 三重県埋蔵文化財センター蔵

No. 1 2

鐸形土製品 太田遺跡（津市長岡町） 弥生時代 三重県埋蔵文化財センター蔵

No. 1 3

双脚壺 亀井遺跡（津市河辺町） 弥生時代 三重県埋蔵文化財センター蔵

No. 1 4

石斧 向山遺跡（津市高茶屋小森町）
弥生時代 津市蔵

No. 1 5

石斧 長遺跡（津市河辺町） 弥生時代 津市蔵



No. 1 6

石製品 亀井遺跡（津市河辺町） 弥生時代 津市蔵

No. 1 7

弥生土器 片野遺跡（津市一志町片野） 弥生時代（中期） 津市蔵

No. 1 8 津市指定文化財

刻書土器 大城遺跡（津市安濃町） 弥生時代 津市蔵

高杯の脚部に焼成後、鋭利な道具で文字と考えられる線刻を施しています。
線刻は「奉」の漢字とする説があります。



No. 1 9

絵画文土器 六大A遺跡（津市大里窪田町） 弥生時代
三重県埋蔵文化財センター蔵

No. 2 0 津市指定文化財

高茶屋銅鐸 1 号鐸 弥生時代 津市蔵

昭和 6 1 年（1 9 8 6）に津市高茶屋小森町から出土した突線紐 2 式の近畿式銅鐸で、高さ 6 6 . 3 cm です。この 1 号鐸とともに複数の銅鐸の出土が確認されています。



高茶屋銅鐸 1 号鐸

No. 2 1 三重県指定文化財

野田銅鐸（複製） 弥生時代

津市蔵（原資料 専修寺）

横帯に連続渦文を施した三遠式銅鐸と呼ばれるもので、三河や遠江で多く発見されています。高さは 6 4 . 8 cm です。

石川之娶「銅鐸考」には、谷川土清が米一俵で買い上げて所蔵していた銅鐸を息子の土逸が専修寺に献上したと記載されています。

和訓栞 江戸時代 津市蔵

No. 2 3

文政8年(1825)に一志郡川口村(白山町川口)の風呂谷で発見された銅鐸について、津藩藩校有造館第2代督学石川之𪛇が記したもの。銅鐸の考察として、谷川士清が所蔵した銅鐸をはじめ、津藩内外で当時出土した銅鐸についての記述もあります。

稲垣家文書「伊勢国一志郡川口村より掘出し銅鐸記録」 江戸時代 津市蔵

[illegible]

No. 2 5

円筒埴輪 市指定史跡 池の谷古墳（津市垂水） 古墳時代（前期） 津市蔵
古墳の外周に立て並べられた筒状の埴輪の一部

No. 2 6

盾形埴輪 蓋形埴輪 国指定史跡 明合古墳（津市安濃町田端上野）
古墳時代（中期） 津市蔵
文様が刻まれた盾を象った埴輪の一部

No. 2 7

土師器壺 中蔦遺跡（津市大里窪田町） 古墳時代 津市蔵
口縁部に段がある壺。胴部に籠目痕がある

No. 2 8

須恵器 久居窯跡群（津市久居藤ヶ丘町） 古墳時代 津市蔵
5世紀末から6世紀前半にかけて須恵器を生産していた窯跡。三重県で最も古い窯跡の一つとされています。

No. 2 9

須恵器 徳居10号窯跡（津市河芸町） 古墳～飛鳥時代 津市蔵
津市河芸町から鈴鹿市にかけて広がる三重県内最大の古窯跡群のなかの一基。



No. 3 0

鶏形埴輪 稲葉 5 号墳（津市緑が丘二丁目）

古墳時代 津市蔵

尾羽根の形などに、雌雄の違いがあります。



No. 3 1

家形埴輪 上野遺跡（津市青葉台一丁目） 古

墳時代（後期） 津市蔵

平屋と高床式の二つの家形埴輪が底部を合わせた状態で埋設されていたことから、埴輪を棺として転用したものと考えられています。

No. 3 2

鶏形埴輪

子持勾玉 上村遺跡（津市半田） 古墳時代 津市蔵

No. 3 3

木製品・石製品 六大A遺跡（津市大里窪田町） 古墳時代

三重県埋蔵文化財センター蔵

No. 3 4 三重県指定文化財

初期須恵器・韓式系土器 六大A遺跡（津市大里窪田町） 古墳時代

三重県埋蔵文化財センター蔵

初期須恵器は、朝鮮半島から須恵器の焼成技術が伝わって間もないころに生産された須恵器です。また、韓式系土器は主に朝鮮半島から集団で渡来した人々が用いていたとされる土器です。

No. 3 5

銅鏡 庄田 2 号墳（津市庄田町） 古墳時代 津市蔵

No. 3 6

銅鏡 伝善応寺古墳群（津市戸木町） 古墳時代 津市蔵

No. 3 7

耳環 中野山 1 4 号墳（津市一志町） 古墳時代 津市蔵

銅地に鍍金（金メッキ）を施したものです。

No. 3 8

鹿角装刀子 メクサ 4 号墳（津市分部） 古墳時代 津市蔵

No. 3 9 津市指定文化財

銀象嵌円頭大刀 平田 1 4 号墳（津市安濃町） 古墳時代 津市蔵

刀装具である柄頭・鐔・鞘尻に、銀糸を埋めた象嵌が施されています。



銀象嵌円頭大刀

No. 4 0 津市指定文化財

合口甕棺 西毛谷南古墳（津市河芸町） 古墳時代 津市蔵

No. 4 1 三重県指定文化財

陶質土器 木造赤坂遺跡（津市木造町） 古墳時代 三重県埋蔵文化財センター蔵

4 世紀後半から 5 世紀前半に朝鮮半島で作られた硬質の土器です。

No. 4 2

金銅装馬具 高茶屋大塚古墳（津市高茶屋小森町） 古墳時代

奈良県 個人蔵（奈良県立橿原考古学研究所附属博物館保管）

大正 4 年（1 9 1 5）に一志郡高茶屋村大字小森字大塚から出土したもので、
6 世紀末から 7 世紀の横穴式石室をもつ古墳から出土したものと考えられます。

No. 4 3

金銅装馬具 刀装具 薬師谷 1 4
号墳（津市一志町八太） 古墳時代
津市蔵



金銅装馬具

2章 古代（奈良・平安時代）

大化改新や壬申の乱をへて、「律」と「令」という法律によって国が治められるようになり、戸籍などをもとに農民には口分田が支給され、租庸調の税が取り立てられるようになりました。全国は国郡里（のちに郷）に分けられ、伊勢国には13郡が置かれました。津市は当時の菟芸郡、安濃郡、一志郡にあたります。平安時代に編纂された「和名類聚抄」によると、菟芸郡は4郷、安濃郡は9郷、一志郡は10郷からなりました。

近年の発掘調査で津市大里窪田町の六大B遺跡からは、規則的に並んだ掘立柱建物跡群をはじめ、木簡や硯などが見つかったことから、菟芸郡窪田郷に関わる役所跡ではないかと考えられています。

また、津市白山町の関ノ宮遺跡からは古代の役所から出土する瓦と同じ文様の軒丸瓦が見つかっており、都と伊勢を結ぶ古代の道に設けられた「川口関」に関わるものではないかと考えられています。



<展示資料>

No.4 4 三重県指定文化財

鳥居古墳 押出仏・埴仏 飛鳥～奈良時代 三重県総合博物館蔵

No.4 5

軒丸瓦・軒平瓦 四天王寺瓦窯跡（津市栄町一丁目） 飛鳥～奈良時代
三重県総合博物館蔵

No. 4 6

蹄脚硯 六大A遺跡（津市大里窪田町） 飛鳥時代 三重県埋蔵文化財センター蔵

No. 4 7

木簡 六大B遺跡（津市大里窪田町） 奈良時代 三重県埋蔵文化財センター蔵

「□□十月七日神荷百疋」と墨書されています。

「百疋」とあることから、布や織物に付けられた荷札木簡と考えられます。

No. 4 8

銭貨 和同開珎 六大B遺跡（津市大里窪田町） 奈良時代

三重県埋蔵文化財センター蔵

和同開珎は、和銅元年（708）に銀銭、続いて銅銭が発行されましたが、翌年には銀銭のみ発行が廃止されました。

No. 4 9

銭貨 和同開珎 千里ヶ丘遺跡（津市大里窪田町） 奈良時代

三重県埋蔵文化財センター蔵

昭和33年ごろ、農作業中に発見されたもの。

No. 5 0

墨書・刻書土器 窪田大垣内遺跡（津市大里窪田町） 平安時代

三重県埋蔵文化財センター蔵

No. 5 1

緑釉陶器碗 橋垣内遺跡（津市大里窪田町） 平安時代

三重県埋蔵文化財センター蔵

No. 5 2

陰刻花文緑釉耳皿 安養院跡（津市大里窪田町） 平安時代 津市蔵

No. 5 3

基石 位田遺跡（津市北河路）

平安時代 三重県埋蔵文化財センター蔵



陰刻花文緑釉耳皿

No. 5 4

重圈文軒丸瓦 伝関ノ宮遺跡（津市白山町） 奈良時代 津市蔵
古代の役所跡から出土する瓦と同じ文様の軒丸瓦です。



重圈文軒丸瓦

No. 5 5

木簡（複製） 平城京跡（奈良市） 奈良時代
斎宮歴史博物館蔵（原資料 奈良文化財研究所）

（表）「伊勢国安濃郡長屋郷甲可石前調錢壹貫」

（裏）「□□□神亀四年十月」

平城京跡から出土した神亀四年（727）の木簡。伊勢国安濃郡長屋郷の住人である「甲可石前」という人物が、調として錢一貫を納めたことが記されています。

「調」は地方の特産物などを納めるものですが、和銅5年（712）年に調の錢納が認められました。

No. 5 6

木簡（複製） 平城京跡（奈良市） 奈良時代
斎宮歴史博物館蔵（原資料 奈良文化財研究所）

「（前略）

勤解 川口関務所 本土返 夫人事 伊勢国
夫人 男□

（後略）」

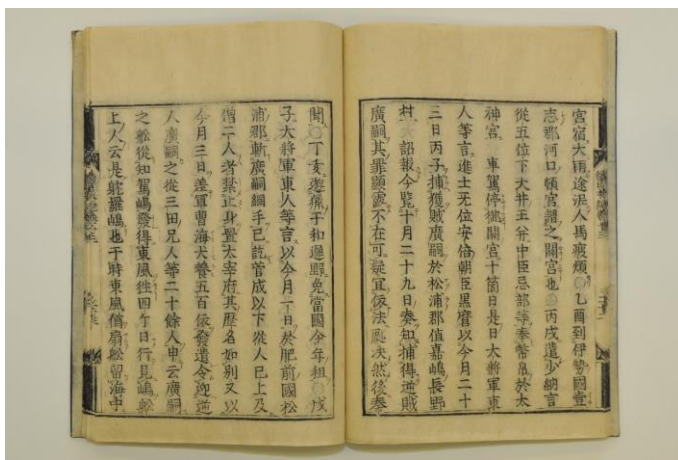
当時、「川口関務所」と呼ばれる行政機関があったことが分かります。

No. 5 7

続日本紀 江戸時代 津市蔵

天平12年(740)に藤原広嗣の乱が起きると、聖武天皇は伊勢へと行幸します。11月2日に一志郡の川口頓宮に到着すると、翌3日に広嗣が捕えられたとの報告が届きます。安心した天皇は4日に和遅野(白山町二本木)で狩りをし、伊勢国のこの年の祖を免除したことが記されています。

『続日本紀』は、六国史の一つで、文武1年(697)～延暦10年(791)までが編年体で記述されています。延暦16年(797)に成立しました。

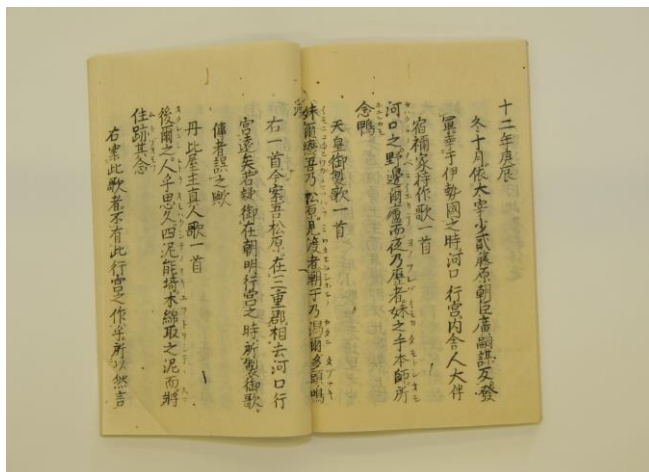


No. 5 8

万葉集 (写本) 江戸時代 津市蔵

十二年庚辰の冬十月、大宰少貳藤原朝臣廣嗣の謀反して軍を發すによりて、伊勢国に幸したまいし時に、河口の行宮にて内舎人大友宿禰家持が作りし歌一首

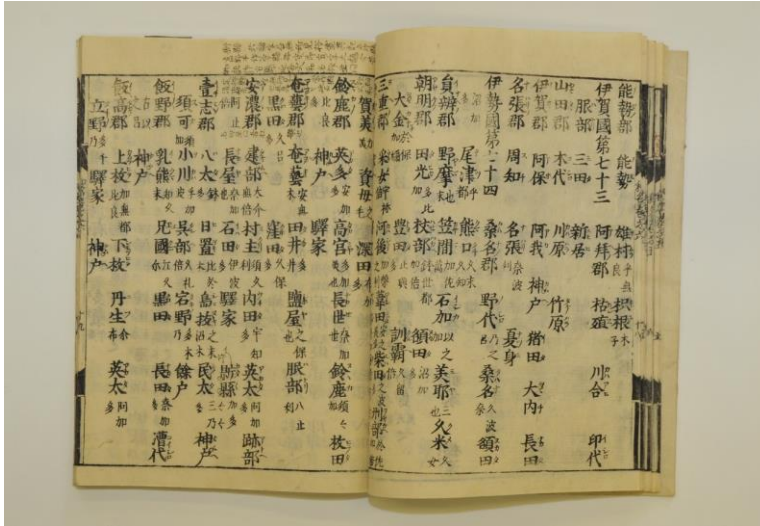
河口の 野辺に廬りて 夜の経れば
妹が手本し 思ほゆるかも



No. 5 9

和名類聚抄 江戸時代 津市蔵

承平年間（931～938）に源順によって著された辞書。国郡を記した条には、伊勢国の当時の郡・郷名が記されています。



No. 6 0

法楽寺文書紛失記釈尊寺手継案（写本） 大正時代

神宮文庫蔵（原資料 国立歴史民俗博物館）

康永3年（1344）に記された文書で、度会郡大橋御園（度会郡度会町）の四至（東西南北の境界）のほか、同御園内にあった醍醐寺（京都市）の末寺法楽寺が紛失した文書等を書き上げたもの。

そのうち、伊向神田に関する箇所「安西郡」「安東郡」内の地名が記されています。

No. 6 1 重要文化財

紙本墨書 民部田所勘注状 平安時代 津市 四天王寺蔵

津市四天王寺の重要文化財薬師如来坐像の胎内から発見された文書の一つで、弘仁12年（821）と天長5年（828）の図帳をもとに、康平5（1062）の安濃郡内の寺領を記したもの。安濃郡内の「塔世」「渋見」「垂水」「忍田」など、現在に通じる地名が記されています。

No. 6 2 三重県指定文化財

漆経塚出土品（津市美杉町下多気） 平安～鎌倉時代 漆区蔵

3章 中世（鎌倉・室町時代）

中世の津市内は、安濃郡長野（美里町）を本拠とした国人領主の長野氏と一志郡多気（美杉町）を本拠とした伊勢国司北畠氏の勢力下にありました。

この情勢が大きく変わるのが織田信長の伊勢進攻で、信長は長野氏には弟信包を、北畠氏には三男信雄を養子に送り、この地域をその手中に収めていきました。

ここでは、多気北畠氏遺跡の発掘調査で出土した資料や長野・北畠氏の勢力下にあった中世城館や古文書、絵図などを通じて、当時の社会の様子を紹介します。



<展示資料>

No.6 3

青磁水鳥形香合 室町時代

津市 北畠神社蔵

昭和初期に北畠氏館跡で採集されたと伝えられています。体部上半は、蓋になっていて、脚部には台座があって非常に豪華なつくりとなっています。



青磁水鳥形香合

No. 6 4

神皇正統記 江戸時代 津市蔵

南北朝時代に公卿の北畠親房が、後村上天皇のために、吉野朝廷（いわゆる南朝）の正統性を述べた歴史書です。はじめに序を、神代・地神について記していて、つづいて歴代天皇の事績を後村上天皇の代まで述べているものです。



神皇正統記

No. 6 5

多気城下絵図 江戸時代 津市蔵

多気の町並みと周辺の山々が描かれ、図の中心には、北畠氏の館(御殿)の建物や庭園、その後ろの山には霧山城が見えます。城下には、たくさんの寺院や家臣の名前、「魚屋町」や「呉服屋町」などの町並みの表記があります。また、多気への出入り口となる峠には、比津・飼坂・白口など八カ所の番所が見られます。絵図の霧山城には、本来はなかった堅牢な造りの石垣や櫓、白壁の天守などが描かれ、後の時代の想像を交えながら描かれたことを示しています。



多気城下絵図

No. 6 6

異本北畠家古地図 江戸時代

津市蔵

注記から天保2年（1831）に、地元の庄官田上源五郎が他の絵図と比較しながら作成したことがわかります。

町屋部分は、建物を絵画的に表現していて、北畠氏の館が絵図の中央からかなり左に描かれています。



異本北畠家古地図

No. 6 7

年代和歌抄 上・下 江戸時代 伊勢市 神宮文庫蔵

「年代和歌抄」は、北畠氏一族の北畠国永の天文5年（1532）から天正12年（1584）に至る詠草集です。原本は失われていて、現在は写本が残るのみです。

No. 6 8 重要文化財

佐藤家文書「北畠満雅御教書」 室町時代 津市 石水博物館蔵

佐藤家は、もともと陸奥国信夫（福島県）を本拠としていましたが、のちに伊勢に移住し、伊勢国人として北畠氏の支配を受けていました。そのため北畠氏発給の文書が多く残されていて、この文書は、一志郡高野の知行を記す伊勢国司北畠氏3代満雅よりの文書です。

No. 6 9 重要文化財

佐藤家文書「北畠氏奉行人教兼奉書」 室町時代 津市 石水博物館蔵

この時期、北畠氏と長野氏の勢力争いのなか、北畠氏から佐藤氏へ垂水での戦いが行われていました。

この文書は、垂水口での戦いで、矢傷を負いながらの働きに対する礼状です。

No. 7 0 三重県指定文化財

無外逸方（北畠政勝）寿像 室町時代 松阪市 浄眼寺蔵

この肖像画を所蔵する浄眼寺（松阪市）は、阿坂城跡の麓に位置する曹洞宗の古刹です。伊勢国司北畠政勝は、文明18年（1486）に入道して「無外逸方」と号して、浄眼寺を菩提寺としました。

この画は、明応3年（1494）に存命中に描かれたもので、北畠氏の当主を描いた唯一現存するものとして貴重なものです。

No. 7 1

南伊勢系土師器
北畠氏館跡（津市美杉町上多気） 室町～戦国時代
津市蔵

No. 7 2

京都系土師器 北
畠氏館跡（津市美杉町上多気） 室町～戦国時代 津市蔵



No. 7 3

天目茶碗 北畠氏館跡（津市美杉町上多気） 室町～戦国時代 津市蔵

No. 7 4

犬形土製品 北畠氏館跡（津市美杉町上多気） 室町～戦国時代 津市蔵

No. 7 5

青磁 北畠氏館跡（津市美杉町上多気） 室町～戦国時代 津市蔵

No. 7 6

金銅装引手金具・金銅金具 北畠氏館跡（津市美杉町上多気） 室町～戦国時代
津市蔵

No. 7 7

銭貨 北畠氏館跡（津市美杉町上多気） 室町～戦国時代 津市蔵

No. 7 8

小札 北畠氏館跡（津市美杉町上多気） 室町～戦国時代 津市蔵



No. 7 9

錠前 北畠氏館跡（津市美杉町上多気） 室町～戦国時代 津市蔵

No. 8 0

金属製品生産関連遺物 多気北畠氏遺跡（津市美杉町上多気） 室町～戦国時代
津市蔵

No. 8 1

栗形 多気北畠氏遺跡（津市美杉町上多気） 室町～戦国時代 津市蔵

No. 8 2 三重県指定文化財

阿濃長野古城図 江戸時代 伊賀市 伊賀市上野図書館蔵

長野城跡は津市美里町桂畑の標高520mの山頂部にあります。この城跡から東へおよそ1kmの美里町北長野に東の城・中の城・西の城という3つの城跡があります。これら、四つの城跡は長野氏が築いたもので、現在、国史跡に指定されています。

阿濃長野古城図は、江戸時代中頃に作られたもので、四つの城跡の絵図として確認されている唯一のものになります。

No. 8 3

垂水城跡出土遺物（津市垂水） 室町～戦国時代 津市蔵

No. 8 4

峯治城跡出土遺物（津市
一身田上津部田） 室
町～戦国時代 津市蔵



No. 8 5

川北城跡出土遺物（津
市大里川北町） 鎌倉
時代 津市蔵

No. 8 6

戸木城跡出土遺物（津市戸木町） 室町～戦国時代 三重県埋蔵文化財センター蔵

No. 8 7 三重県指定文化財

中世墓出土品 雲出島貫遺跡（津市雲出島貫町） 鎌倉時代
三重県埋蔵文化財センター蔵

No. 8 8

青磁碗・皿 井ノ尻・浦ノ戸遺跡（津市一志町八太） 鎌倉時代 津市蔵

No. 8 9

安濃津柳山遺跡出土遺物（津市柳山津興） 鎌倉～室町時代
三重県埋蔵文化財センター蔵

クローズアップ① 津出身の大名 分部氏の歴史

長谷山の麓にある分部の地は、江戸時代の初めに2万石の大名になった分部氏の本拠地と言われます。

分部氏は、もともと長野氏の家臣で、伊勢上野城を居城として、慶長5年（1600）の関ヶ原の戦い後に2万石となりました。その後、元和5（1619）に近江国大溝（高島市）へ転封となり、明治維新を迎えるまで大溝の地を治めました。



<展示資料>

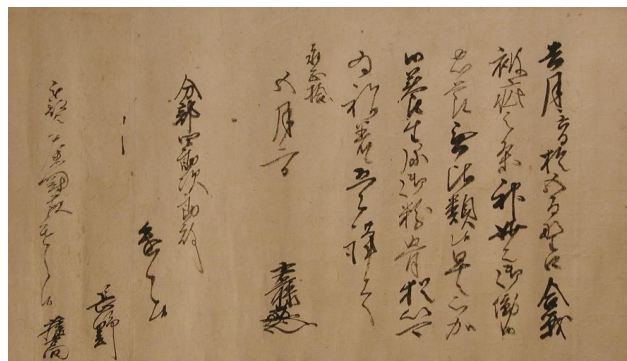
No. 90 滋賀県指定文化財

大溝藩分部家文書

「長野尹藤感状」 室町時代

高島市 高島歴史民俗資料館蔵

永正10年（1513）、五百野口の戦いで傷を負いながらの働きに対して、戦功を賞して長野尹藤が分部光定に出した文書です。



No. 9 1 滋賀県指定文化財

大溝藩分部家文書「長野藤定書状」 安土桃山時代

高島市 高島歴史民俗資料館蔵

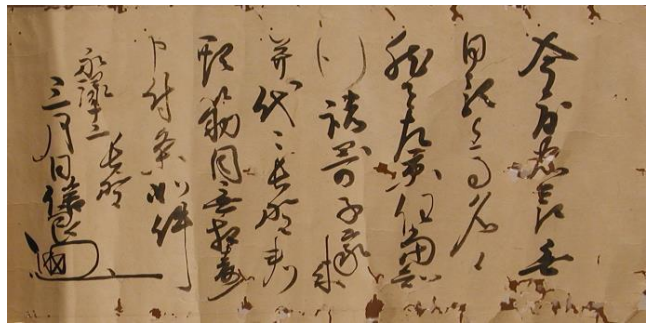
天文19年(1550)、長野藤定より分部光恒が尾崎郷(河芸町)の代官職を与えられたことを示す文書です。

No. 9 2 滋賀県指定文化財

大溝藩分部家文書 「長野信良感状」 安土桃山時代

高島市 高島歴史民俗資料館蔵

永禄12年(1569)、分部光嘉が長野氏へ養子として入った織田信長の弟信良(信包)から忠節に対しての文書です。

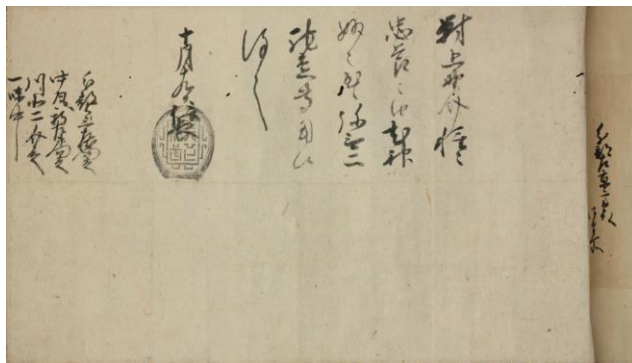


No. 9 3 滋賀県指定文化財

大溝藩分部家文書 「織田信長黒印状」 安土桃山時代

高島市 高島歴史民俗資料館蔵

織田信長が、分部氏に対して織田信包に対する忠節に対して出した文書です。年代は天正4年(1576)頃かと思われます。



No. 9 4～9 6 滋賀県指定文化財

大溝藩分部家文書

「豊臣秀吉知行目録」 安土桃山時代 高島市 高島歴史民俗資料館蔵

文禄4年(1595)8月4日、分部光嘉は豊臣秀吉より、勢州飯野郡宮田村ほかで3千石の知行を与えられ、慶長二年(一五九七)五月晦日、勢州安芸郡越知郷ほかで千二百八十石の加増をうけ、もとの三千石と合わせて四千二百八十

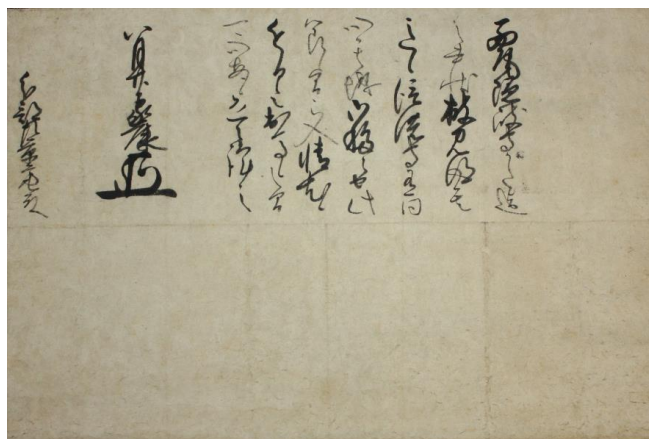
石となり、慶長三年（一五九八）七月二十六日、分部光嘉は豊臣秀吉より、勢州一志郡波瀬村ほかで五千七百八十石五斗八升の加増を受け、合わせて一万石となり、大名となっていました。



No. 9 7 滋賀県指定文化財

大溝藩分部家文書 「徳川家康書状」 江戸時代 高島市 高島歴史民俗資料館蔵

慶長5年（1600）8月20日、徳川家康は、分部光嘉に対して、信濃守（富田氏）と心を同じくして、戦への近日中の出馬の要請を行いました。この後、富田・分部氏は、津城において籠城戦を行いました。



No. 9 8 滋賀県指定文化財

大溝藩分部家文書 「勢州安芸郡本知御加増知行帳」 江戸時代

高島市 高島歴史民俗資料館蔵

慶長6年（1601）3月5日、徳川家康は、分部光嘉に対して勢州白子村ほかで2万石の知行を与えました。そして、伊勢上野藩主となりました。

No. 9 9

分部光嘉知行宛行状 江戸時代 三重県史編さん班蔵

慶長6年(1601)6月、伊勢上野藩主分部光嘉が別所氏に発給した知行130石を与えるものの文書です。



No. 1 0 0

分部光嘉像 江戸時代 津市 円光寺蔵

円光寺は、延文3年(1358)伊勢国栗真庄中山村(栗真中山町)に創建と伝え、元龜年間(1570~1573)に現在の河芸町上野に移り、伊勢上野城主分部氏の菩提寺となりました。元和5年(1619)分部氏の近江大溝への転封とともに移されましたが、そのあとの和歌山藩は上野村・中山村にあった寺領を承認したためそのまま存続しました。現在も境内には分部氏4代の墓碑が残されています。

分部光嘉像は、画面上部に宝暦5年(1755)東福寺第262世の賛があり、この頃作成されたもので分部光嘉を描く唯一の肖像画です。

クローズアップ② 津観音大宝院の歴史

観音寺大宝院は、「津観音」の名称で知られる真言宗の古刹です。寺伝によると観音寺の創設は和銅2年（709）まで遡り、その本坊の大宝院は、奄芸郡窪田（津市大里窪田町）に所在した醍醐寺末寺でした。のちに、寺院建物が兵火に見舞われたこともあり、天正8年（1580）に織田信包が津城下町を形成した時期に観音寺境内へ再興されます。その後、藤堂高虎が津城主になると、観音寺が津城の鬼門にあたるとして、建物の寄進など津藩から庇護を受けました。



<展示資料>

No.101 重要文化財

絹本著色弘法大師像 鎌倉時代 津市 大宝院蔵

真言宗の宗祖、弘法大師（空海）を描いたものです。椅子式の台座に座り、右手に五鈷杵を、左手に数珠を握った姿で描かれています。肉身は墨線、衣は赤茶色の線で描きわけ、唇には朱のぼかしを入れるなど繊細な表現方法がみられます。全体に表現はかたいものの描写が丁寧で、素材の絹地の目も細かく、鎌倉時代後半に制作されたものと考えられています。



弘法大師像

No. 1 0 2 三重県指定文化財

絹本著色大威徳明王像 室町時代 津市 大宝院蔵

大威徳明王は、五大明王の一尊として西方の守護者とされます。泡立つ奔流の上を、右下方へ向かって疾駆する水牛の背に左足だけで立って、右足をふりあげた姿です。立像形式の中でも珍しいもので、制作は室町時代と考えられています。

No. 1 0 3 津市指定文化財

絹本著色尊勝曼荼羅図

室町時代 津市 大宝院蔵

滅罪や祈雨、延命などを目的として行われる尊勝法の本尊となる尊勝曼荼羅図です。描かれる諸尊は伝統的な仏教絵画の描写・描法で、その制作は室町時代前期と考えられています。しかし、諸尊の配置や図像は、多くの尊勝曼荼羅図と異なる図像・図様で、稀少な作例のひとつです。



大威徳明王像

No.104 津市指定文化財

後花園天皇綸旨 室町時代 津市 大宝院蔵

後花園天皇に謁見の時に賜った綸旨で、大宝院にとって最も重要な文書です。その後、法印・僧都等の僧位、僧官の設置を認められ、寺院としての寺格の上昇、整備を物語るものである。



No.105 津市指定文化財

後柏原天皇女房奉書 室町時代 津市 大宝院蔵

お茶と祈祷巻数を献上した礼状であるが、何れも宛先きが東坊城氏になっているごとく献上に当たっては東坊城家が取次いでおり

No.106 津市指定文化財

権大僧都長慶言上状案 室町時代 津市 大宝院蔵

この長慶言上状案によると、文安年中（1444～49）の草創で、開基は長円僧正。長円は東坊城和長の幼少時の学問の師で、その縁で彼の祖父益長の猶子となり、その斡旋で後花園天皇に謁見、その際、僧正の官を授けられるとともに、大宝院は祈願所になったといえます。

No.107 津市指定文化財

伊勢国安芸郡窪田幡多寺屋敷門前御検地帳写 安土桃山時代 津市 大宝院蔵

六大院が創建されたときは、安芸郡窪田（大里窪田町）にありましたが、兵火にあい、のちに観音寺境内に再建されます。その旧地10石が六大院（大宝院）の寺領の一部に加えられたこの検地帳は、旧地にあった門前屋敷（19軒分）を検地し、もと寺があった地5畝を無年貢地にして六大院に与えた際のものです。

No. 1 0 8 津市指定文化財

伊勢国一志郡七栗内中村郷上津前検地帳 安土桃山時代 津市 大宝院蔵

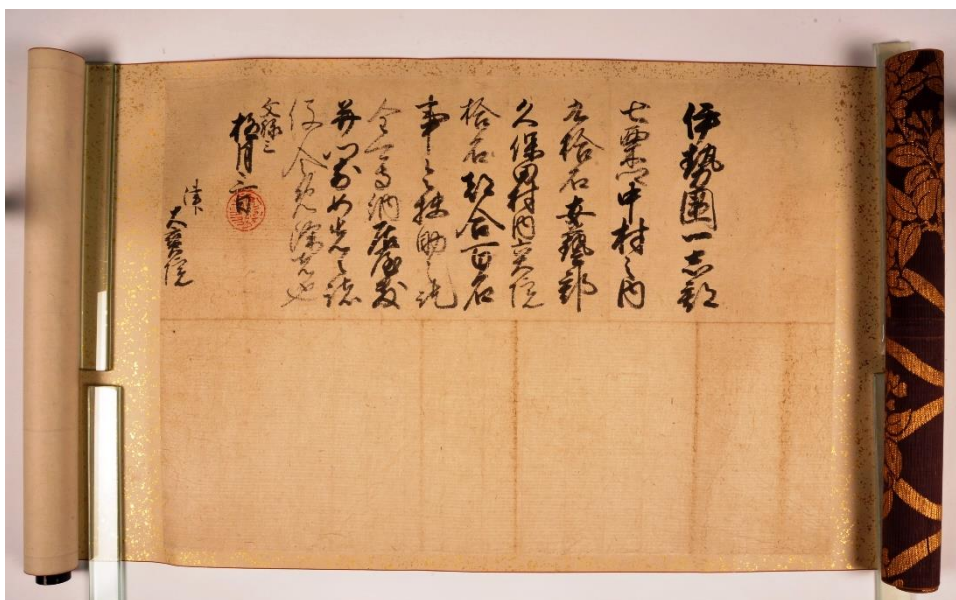
大宝院の寺領は一志郡七栗郷中村の内、上津前で90石、安芸郡窪田（久保田）村の内、六大院（津へ移る前の旧地）10石、計100石です。

七栗郷中村のうち上津前で90石も寺領となっていますが、この検地帳は中村の方のもので、内容は田・畠・屋敷を一筆ごとに測量し、田方・畠方・屋敷方に分けて等級・面積・石高・名請人を記載しています。

No. 1 0 9 津市指定文化財

豊臣秀吉朱印状 安土桃山時代 津市 大宝院蔵

この朱印状は、豊臣秀吉が大宝院へ寺領を寄進したものです。七栗郷中村の内、90石、久保田（窪田）村の内六大院10石、計100石を与え、さらに津の寺地と門前を無年貢地として諸役を免除しています。



No. 1 1 0

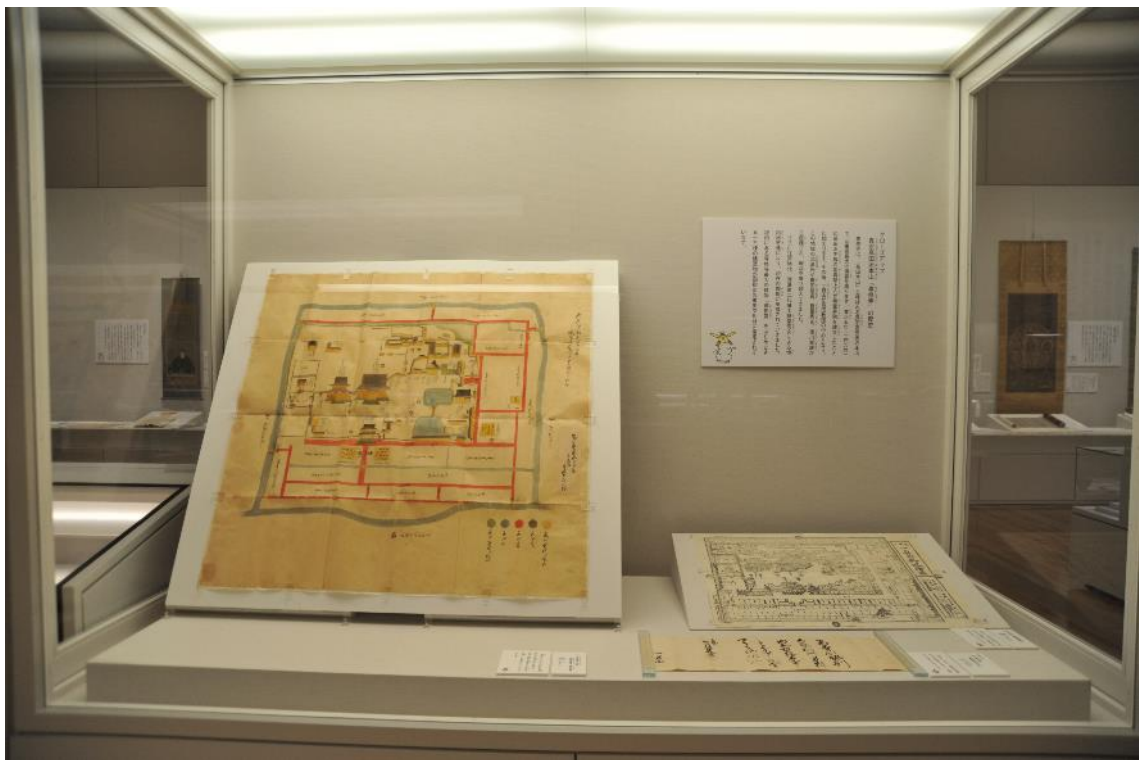
伊勢参宮名所図会 江戸時代 津市蔵

寛政9年（1797）に刊行された本編5巻6冊、附録1巻2冊からなる伊勢参宮の案内書です。巻3には伊勢街道沿いの寺院、旧跡等が書かれていますが、観音寺は現在では行われていない鬼押さえ行事が紹介されています。また、大宝院は境内左側に描かれています。

クローズアップ③ 真宗高田派本山「専修寺」の歴史

専修寺は、「高田本山」と呼ばれる真宗高田派の本山で、三重県最大の偉容を誇ります。寛正5年（1464）に高田派中興の祖真慧上人が無量寿院を建立したことに始まります。その後、一身田が高田教団の中心となり、この地域の北畠氏や織田信長、豊臣秀吉、徳川家康から庇護され、戦乱を乗り越えてきました。

さらに江戸時代、津藩第2代藩主による境内地寄進により、現在の伽藍が形成されていきました。境内にある専修寺最大の建物「御影堂」をはじめとする13棟の建造物が国指定の重要文化財に指定されています。



<展示資料>

No.111 重要文化財

専修寺文書 「長野植藤書下」 室町時代 津市 専修寺蔵

大永3年（1523）に国人領主長野植藤が発給した文書で、欠損部があり、その具体ははっきりしないものの、この時期、長野氏が高田門徒への影響力をもっていたことがわかります。

No. 1 1 2 重要文化財

専修寺文書 「伊勢国司北畠氏奉行人奉書」 室町時代 津市 専修寺蔵

天文16年(1544)に伊勢国司北畠氏の奉行人山室教兼が発給した文書で、北畠氏により専修寺門徒の活動について保証していたことがわかります。

No. 1 1 3 重要文化財

専修寺文書 「伊勢国司家奉行人奉書」 室町時代 津市 専修寺蔵

(No. 1 1 2)と同様の文書を永禄5年(1562)に発給していて、依然として北畠氏により専修寺門徒の活動が保証されていたことがわかります。

No. 1 1 4 重要文化財

専修寺文書 「織田信長禁制」 安土桃山時代 津市 専修寺蔵

元亀元年(1570)に織田信長から「一身田無量寿寺并門前」に対して安全を保証した文書です。信長は専修寺ではなく一身田無量寿寺という名称を使用しています。



No. 1 1 5 重要文化財

専修寺文書 「羽柴秀吉禁制」 安土桃山時代 津市 専修寺蔵

天正12年(1584)小牧・長久手の戦いの際、「専修寺御門跡」に宛てたもの。諸国末寺・諸門徒の管領はこれまでどおり安堵、竹木伐採や陣取・非分を禁じて門前を守る内容が記されています。

No. 1 1 6 重要文化財

専修寺文書 「徳川家康禁制」 安土桃山時代 津市 専修寺蔵

天正12年(1584)小牧・長久手の戦いの際、「無量寿寺」へ出された禁制。徳川家の軍勢が無量寿寺で乱入狼藉等を犯さないよう戒めています。この時期に専修寺には「羽柴秀吉禁制」(No. 1 1 5)も出されています。

No. 1 1 7 重要文化財

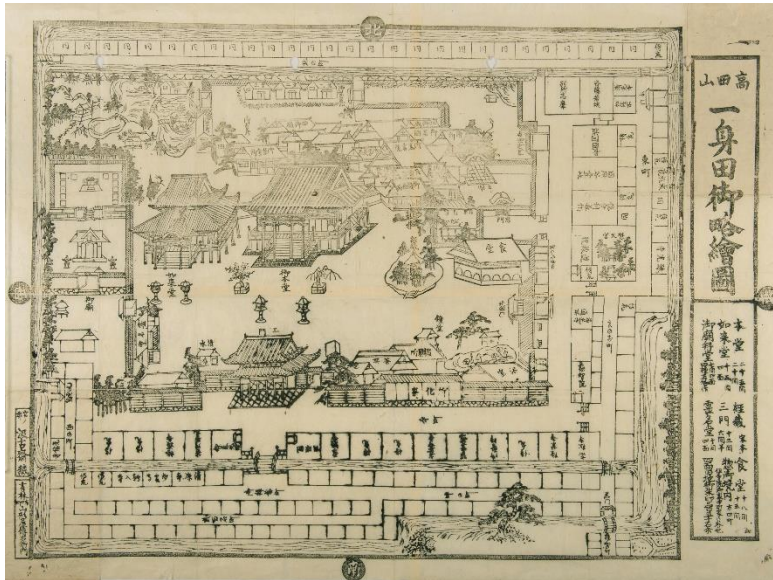
専修寺文書 「豊臣秀吉朱印状」 安土桃山時代 津市 専修寺蔵

文禄5年(1596)、豊臣秀吉が専修寺へ寺領を寄進したものです。一身田村のうち350石となっています。

No. 1 1 8

高田山一身田御略繪図 江戸時代 津市 専修寺蔵

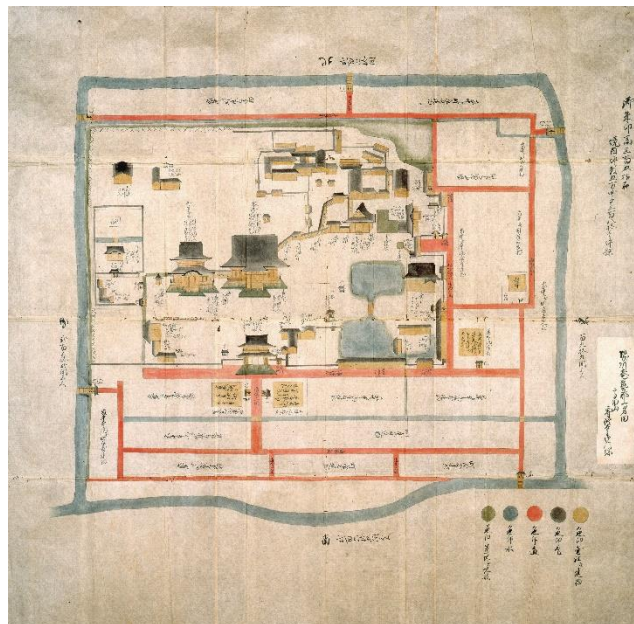
江戸時代の一身田寺内町の様子を伝える最古の木版絵図です。宝暦年間の頃の様子を描いたものとされています。



No. 1 1 9

勢州奄芸郡一身田高田山専修寺 御門跡絵図 江戸時代 津市 専修寺蔵

寛政4年(1792)に作成された専修寺を中心に寺内町を描いた絵図です。この時期、御影堂と如来堂をつなぐ通天橋や唐門は、まだ整備されていないことがわかります。



4 章 近世（安土桃山・江戸時代）

安濃津は、明応7年（1498）に起こった大地震以後、港の機能を失い、町の様相は一変することになるものの、天正8年（1580）ごろ織田信包によって安濃津城が完成しました。その後、富田氏の支配を経て、慶長13年（1608）藤堂高虎が津に入封すると、城の規模を拡張し、本格的な城下町の形成をはかりました。

元和5年（1619）紀州徳川家の治める和歌山藩が成立すると津藩領内だった5万石が和歌山藩領となり、代わりに山城国・大和国内で5万石が津藩領となりました。また、同時に伊勢上野藩の分部氏は近江大溝へと転封となり、伊勢上野藩はなくなり、和歌山藩領となり、この時期に大きな変革がありました。

さらに、津藩では、第2代藩主・藤堂高次は寛文9年（1669）に隠居する際、次男の藤堂高通に5万石を分与して、支藩となる久居藩を立藩させ、野辺野の地に陣屋と城下町を形成しました。これ以降、藤堂氏は、外様大名でありながら、一度も所替えをすることなく明治を迎えることになりました。



< 展示資料 >

No. 120

伊藤又五郎家文書「長野氏奉行人連署状」

室町時代 三重県総合博物館蔵

大永2年(1522)8月14日、津の百姓中に宛てられたこの地域の公事(公の仕事)について書かれたもの。

この当時、この地域を司る複数の担当者がいたことがわかります。

No.121

累世記事 江戸時代 伊賀市 伊賀市上野図書館蔵

津藩初期の故事や古老の伝承を記したもの。「織田上野介信包、天正8年(1580)此处に移る」とされていて、このとき津城が現在地に築かれたと考えられます。

No.122

織田信包築城時古図 江戸時代 三重県史編さん班蔵

江戸時代中期の写しで、創作図の可能性がありますが、城の広い内堀の中に二之丸、三之丸・局丸が描かれています。東の外堀には地頭領口と分部口に土橋を架橋して大手口として、後に行われる藤堂高虎の大改修で西之丸となった場所には「織田民部殿屋敷」と書かれています。

No.123

富田知信免許状 安土桃山時代 三重県総合博物館蔵

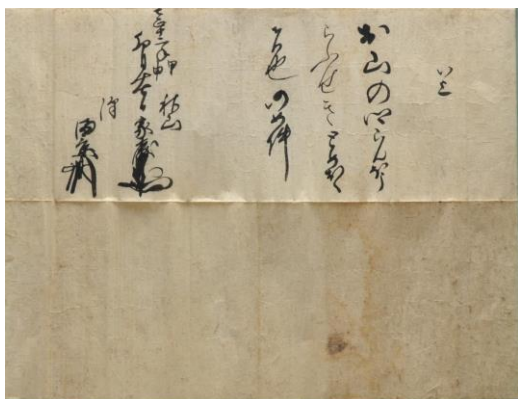
富田知信が津城主となった後、津町に駅伝(宿場の仕事)以外を免除した文書です。

No.124 津市指定文化財

青巖寺古文書 「沢満景・秋山家慶連署禁制」

室町時代 津市 青巖寺蔵

天正12年(1584)大和宇陀の武将沢氏・秋山氏が、部下に小山で乱暴・狼藉しないようにと出した文書です。



No. 1 2 5 津市指定文化財

青巖寺古文書 「安国寺恵瓊・長束正家連署禁制」

安土桃山時代 津市 青巖寺蔵

関ヶ原の戦いの前哨戦とされた津城での戦いで、津城を攻略した安国寺恵瓊・長束正家が、慶長5年（1600）8月26日に青巖寺で宿泊した時に乱暴・狼藉などしないよう出された文書です。



No. 1 2 6 滋賀県指定文化財

大溝藩分部家文書 「分部家歴代系譜書上」 江戸時代

高島市 高島歴史民俗資料館蔵

大溝藩初代藩主分部光信が、寛永18年に江戸幕府へ分部家の由緒来歴を報告したものの写しです。

展示の部分は、「伊勢津城籠城戦之事」で、分部家藩祖の分部光嘉が、津城主富田氏とともに戦った関ヶ原の戦いの前哨戦とされる津城籠城戦の状況を記すものです。

No. 1 2 7 重要文化財

絹本著色藤堂高虎像附同夫人像

江戸時代 津市 四天王寺蔵

藤堂高虎像は晩年の風貌を描くものですが、戦国武将としての風格を的確に表しているといえます。また、切れ長の柔和な表情の夫人像（久芳院）は洗練された女性像が表されています。藤堂高虎の肖像画は他にも所在しますが、夫人像と対幅で伝わるものは、この津市四天王寺所蔵が唯一のものとなります。



No. 1 2 8 津市指定文化財

藤堂高虎画像

江戸時代 津市 玉せん寺蔵

この画像は、津市四天王寺所蔵とは異なる風貌で、重要文化財の西蓮寺（伊賀市）所蔵の肖像画と同じ系統になります。切れ長の目と一文字に結んだ口元の表現が特徴的です。画像上部には天台宗の僧天海の賛が記されています。



No. 1 2 9 伊賀市指定文化財

高山公実録 江戸時代 伊賀市 伊賀市上野図書館蔵

藤堂高虎の一代記で、文政年間（1818～1830）に編さんされたと考えられ、50巻25冊から成るものです。家臣の記録等を含む引用書目264部に及ぶ膨大な典拠史料によって編年体で編さんされました。

No. 1 3 0

藤堂高虎奉行人連署状 江戸時代 三重県総合博物館蔵

慶長13年（1608）6月15日付で、津藩加判奉行の赤尾久右衛門尉・石田多左衛門尉から、津町中の諸職などの免許について出した文書。

No. 1 3 1

藤堂高次奉行人連署状 江戸時代 三重県総合博物館蔵

寛永9年（1632）5月6日付で、津藩加判奉行の百々太郎兵衛・馬淵半右衛門が津町中の諸職などの免許について出した文書。慶長13年の藤堂高虎奉行人連署状とほぼ同文。

No. 1 3 2

町中之覚 江戸時代 三重県総合博物館蔵

元和2年（1616）12月12日付で、津藩加判奉行の赤尾久右衛門尉より津町年寄へ出された5か条からなる法規を示した文書。

No. 1 3 3

掟書 江戸時代 三重県総合博物館蔵

元和7年(1621)5月1日付で、津藩加判奉行の百々太郎兵衛より津町年寄へ出された9か条からなる法規を示した文書。

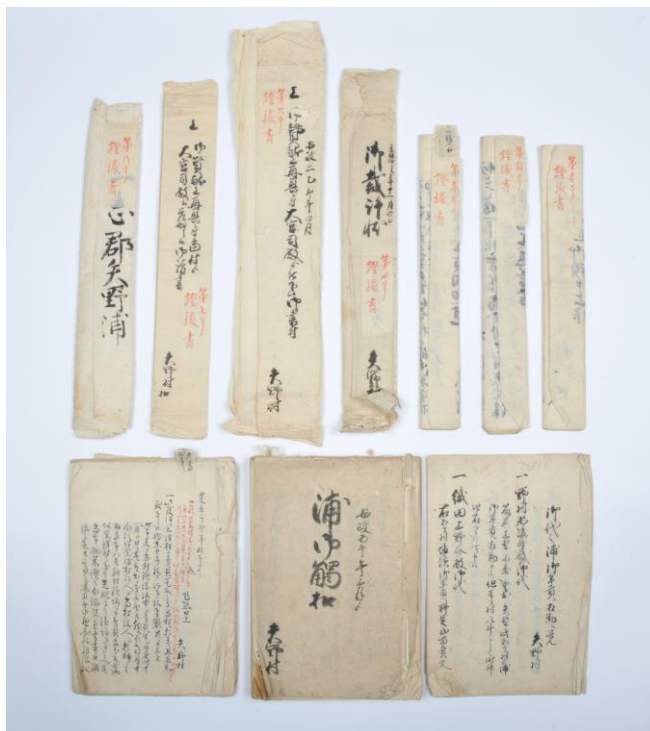
No. 1 3 4 津市指定文化財

矢野浦漁業権その他漁場関係文書

江戸時代

津市 香良洲漁業協同組合蔵

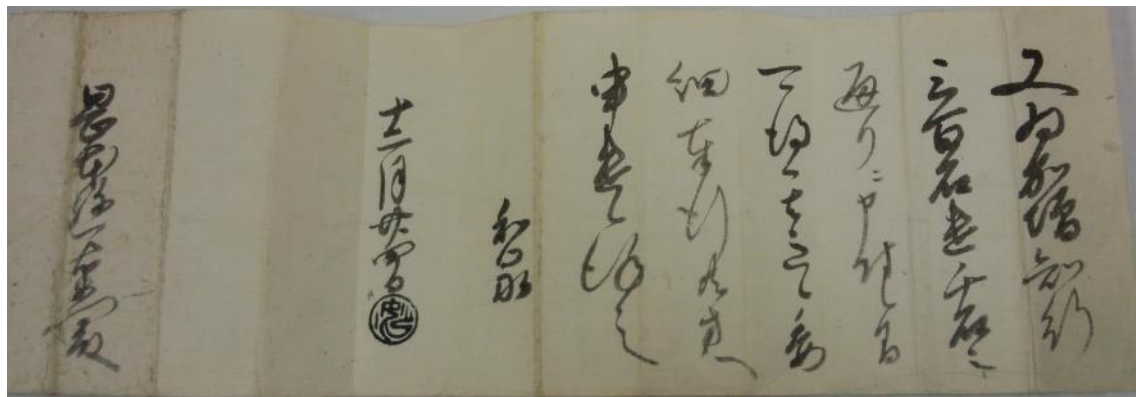
享保4年(1719)の矢野浦での漁場争いの経過と延元2年(1337)以後の矢野浦の漁業権と浦年貢の歴史がわかる文書です。



No. 1 3 5

岡本家文書「藤堂高虎書状」 江戸時代 津市蔵

寛永4年(1627)12月に藤堂高虎から岡本弥一衛門へ発給された文書です。岡本家は、このとき鉄砲頭の任命と300石が加増され、合わせて1000石を有することになりました。



No. 1 3 6

藩領図 安濃郡・一志郡 江戸時代 三重県史編さん班蔵

江戸時代中期に描かれたものとされ、安濃郡・一志郡に分け表裏に描いています。描かれる各村々は、色分けによって津藩・久居藩・白子領（紀州藩）・一身田（専修寺領）・大宝院領が区別されています。

No. 1 3 7

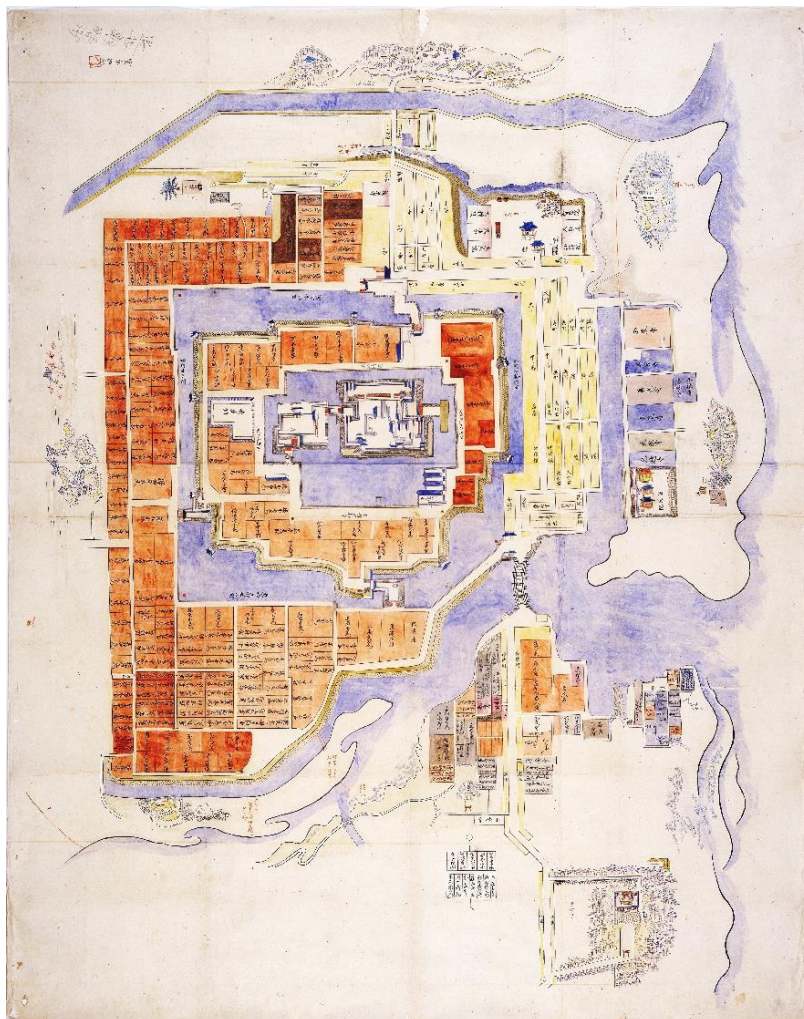
藩領図 一志郡 江戸時代 三重県史編さん班蔵

江戸時代前期に描かれたものとされ、No. 1 3 6と同様に描かれる各村々は、色分けされ灰色が久居藩、黄色が津藩、白色が和歌山藩と区別されています。

No. 1 3 8

津城下絵図（寛永期） 江戸時代 津市蔵

藤堂高虎が津に入封後の津城下の家臣屋敷配置図としては、最も古いものになります。丸之内（二之丸）には重臣の屋敷が並んでいます。



No. 1 3 9

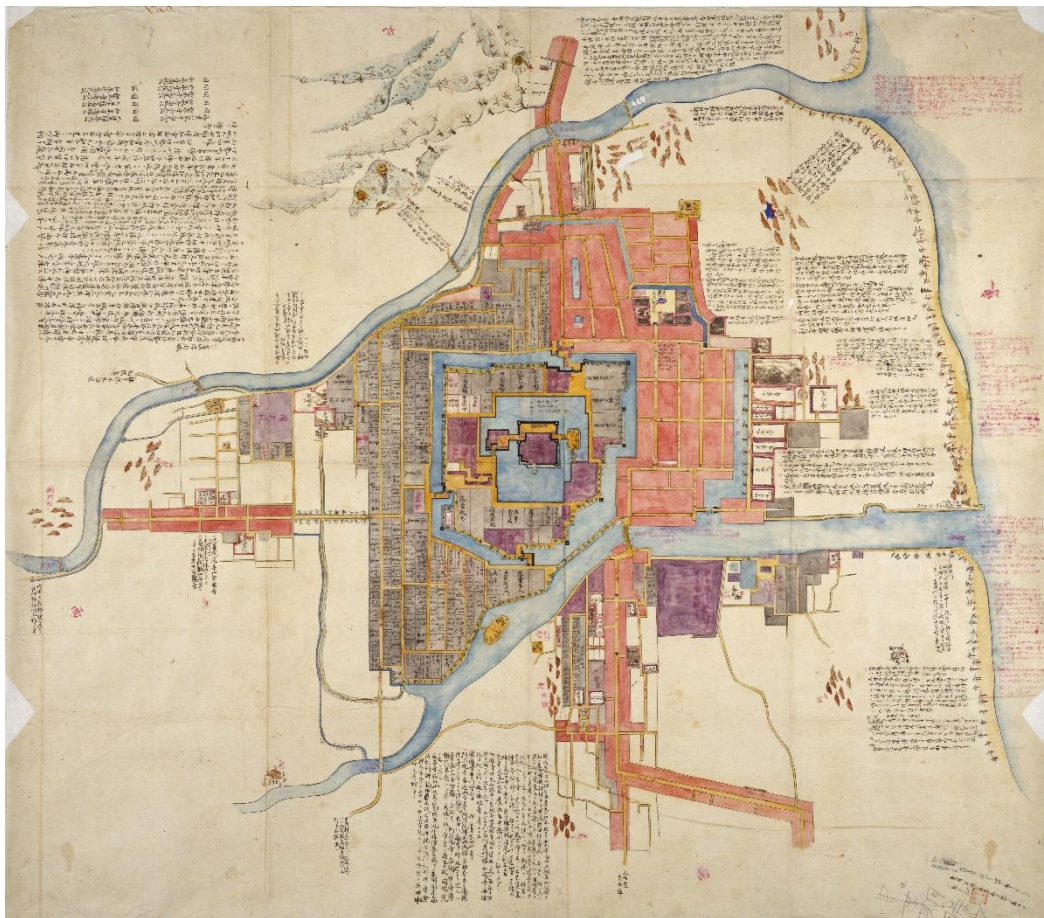
津御城下分間絵図 江戸時代 三重県史編さん班蔵

現存する津城下図の中では最も正確、詳細な図面となり享保4年(1709)に作成されました。寛永期の絵図では、重臣の屋敷で占められていた二之丸に御対面屋敷や評定所などの役所が描かれています。

No. 1 4 0

津城下絵図(嘉永期) 江戸時代 津市蔵

津城内(二之丸)でこれまで御対面屋敷だった場所は、文政2年(1819)に創設された藩校有造館の記載となっています。また、津城下への各入口の番所の記載のほか、城下内の町々に木戸が描かれています。さらに、描かれた城下の寺社や村々、安濃松原等の名勝地の由緒等が、『三国地誌』や『勢陽五鈴遺響』等を出典に書かれているのも特徴といえます。



No.1 4 1 三重県指定文化財

三重県行政文書「御城内御建物作事覚四」 江戸時代 三重県総合博物館蔵

津城は寛文2年(1662)に火災によって城内の建物が焼失します。これは、その再建に用いられた図面で、平面図・立面図・断面図と文字の記録で構成されています。

No.1 4 2 津市指定文化財

藩主の木像 江戸時代 津市 玉せん寺蔵

藩主の木像は、久居藩初代藩主藤堂高通と2代高堅の2軀あり、この像は初代高通のものです。黒漆の厨子の中に納められ、彩色された衣冠束帯の坐像で、気品ある藩主の風格がしのべれます。



藩主の木像 久居藩初代藩主藤堂高通公

No.1 4 3

久居外構要害図 江戸時代 津市蔵

寛文9年(1669)に立藩した久居藩は、その居城地を久居とし城地の形成を始めます。この絵図に描かれるのは、実際のものとは異っています。城地設計のどの段階のものであるかは不明ですが、この図に描かれる西洋風ともとれる三角罫は先進的なものといえます。



久居外構要害図

No. 1 4 4

津八幡神社祭礼絵巻 江戸時代 津市 石水博物館蔵

江戸時代後期の八幡宮の祭礼を克明に写し出したものです。行列の町順は西町が先頭で行列もののほか、曳きものや釣りものがあり、華やかな祭礼行列が見て取れます。現在も津まつりでみられる「しゃご馬」や「唐人踊り」、「八幡獅子舞」も描かれています。

No. 1 4 5

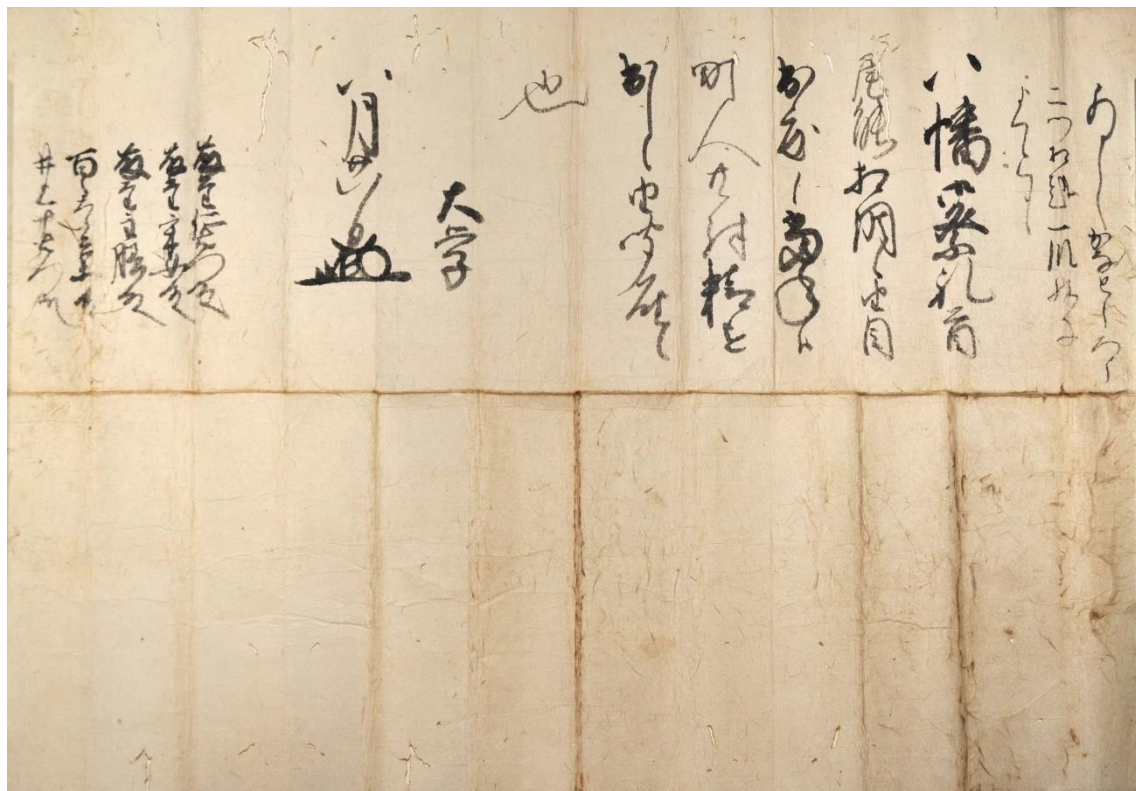
津八幡宮祭礼絵巻 江戸時代 津市蔵

祭礼行列の全体を表したのではなく、残念ながら何かの理由でいくつかに分断されていて、町印や行列の順番は入れ替わっています。内容は、江戸時代後期の祭礼を描くもので、精緻な描写から絵師の手によるものと思われます。

No. 1 4 6 津市指定文化財

古文書八幡町文書「藤堂高次書状」 江戸時代 津市 津八幡宮蔵

差出人の大学とは、津藩2代藩主の藤堂高次のことです。内容は、津八幡神社の祭礼が首尾よくできたことを記しています。宛名の重臣や加判奉行（百々・井上）の名前などから推察すると、寛永13年から17年（1636～40）に出されたものと思われます。



No. 1 4 7

中川蔵人日記 江戸時代 津市蔵

中川蔵人家は、代々津藩の番頭や家老職を務めた家柄です。この日記は、天保4年（1833）から慶応4年（1868）にかけて書かれた18冊からなり、津藩政に関わる事柄や当時の日常生活を垣間見ることができます。

No. 1 4 8

津藩東征軍関係文書 明治時代 津市蔵

慶応4年（1868）1月の鳥羽・伏見の戦いでは苦悩の末、官軍に加わることになり、以後、津藩は東征軍として進軍していきました。この文書群は、主に慶応4年閏4月からの東征従軍の日記やその費用、総督府からの通達写しを書き留めています。

No. 1 4 9

スペンサー騎銃

江戸時代 津市蔵

No. 1 5 0

ツンナール銃

江戸時代 津市蔵

幕末期に津藩が購入したもので、この洋式銃2挺は中川蔵人家旧蔵のもので
す。当時の価格は、ツンナール銃が5両、スペンサー騎銃が15両だったと伝わ
っています。



上段：ツンナール銃 下段：スペンサー騎銃

No. 1 5 1

白毛兜（藤堂仁右衛門着用） 江戸時代 個人蔵

No. 1 5 2

陣羽織（藤堂仁右衛門着用） 江戸時代 個人蔵

慶応4年（1868）東征軍に参加した津藩は、城代家老藤堂仁右衛門高泰が
総帥となり、東海道の先鋒として関東各地、奥州攻めに従軍し、奥州が平定され
たのち、11月19日に津城下に凱旋しました。

写真は、津藩東征軍隊を撮影したもので、写真中央に騎乗の藤堂仁右衛門の姿
があります。その時に着用していたのが、この白毛兜と陣羽織です。

No. 1 5 3 津市指定文化財

天から降った神札 明治時代 津市蔵

慶応4年(1868)1月12日に上野(河芸町)秋田家に天から降った皇家々では酒食を近隣や街道を行く通行人まで振舞って祝宴を開いたといひます。



No. 1 5 4

風刺画「幼童遊び子をとろ子をとろ」 江戸時代 津市蔵

古くからある子ども遊びを旧幕府方と官軍方に見立てたものです。左側の子どもたちが旧幕府方、右側の子どもたちが官軍方を表現しています。右側3番目の「蔦柄」の着物の子が津藩を表しています。



No. 1 5 5

風刺画「子供芝居忠臣蔵四段目」 明治時代 津市蔵

江戸城開城を忠臣蔵四段目の城明け渡しに見立て風刺したものです。画面左が官軍方、画面左上で舞台から去っていくのは徳川慶喜で、江戸城を出て行く様子を描いています。津藩と和歌山藩は、官軍方の一団に描かれています。

No. 1 5 6

風刺画「流行なぞなぞ尽くし」 明治時代 津市蔵

慶応4年(1868)春頃の諸藩の動向を、なぞ解きにして風刺したものです。右上部の「蔦」が津藩を表し、その下の男性が「キ」の字の着物で、紀州藩を表しています。



クローズアップ① 津が生んだ国学者「谷川士清」

谷川士清（1709～1776）は、八町に生まれ、家業の医者になるために勉学に励み、京都に遊学し、医学のほか、本草学・儒学、神道、茶道、華道など多くを学びました。津に帰郷後は、医業のかたわら学問にも打ち込み、家塾「洞津谷川塾」を開き多くの人々教えました。また、自身の研究では、日本書紀の注釈書「日本書紀通証」（全 35 巻）を完成させ、さらに士清の大偉業となる、わが国最初の本格的な五十音順国語辞典、「和訓栞」（全 93 巻）をまとめています。

No. 1 5 7 三重県指定文化財

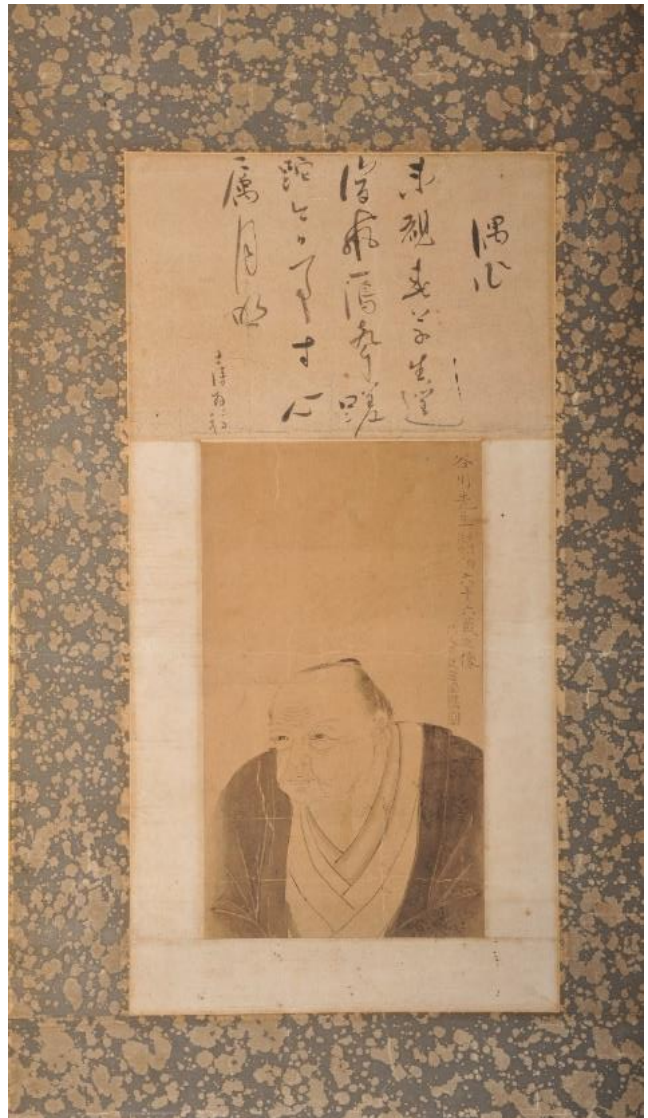
紙本淡彩谷川士清像 江戸時代
津市蔵

白の着物に黒の羽織を着けた上半身の肖像で、右上に「谷川先生士清号淡斎六十六載之像 門人三井諤謹図建子」と記されます。安永 3 年（1774）士清 66 歳の時に描かれたもので、士清の肖像画としては唯一のものです。

No. 1 5 8 三重県指定文化財

紙本墨書谷川士清関係資料「医書摘録並に詩原稿」 江戸時代
津市 石水博物館蔵

医師としての谷川士清の活動を示す記録は少なく、この資料に収録される「熱入血室之弁」や「閑格異同弁」などの著述は、医師としての士清のうかがえる貴重な資料です。



No. 1 5 9

日本書紀通証 江戸時代 津市蔵

士清の国学の研究のひとつが、古い時代の日本の歴史が書かれた『日本書紀』をわかりやすくするために説明を加えることでした。二十数年間の研究の末、『日本書紀通証』（全35巻）としてまとめ、さらに、その中の第一巻付録である「倭語通音」は、動詞活用図表で、動詞の活用語尾が五十音図の同じ行になることを示しています。

No. 1 6 0 三重県指定文化財

紙本墨書谷川士清関係資料「和訓栞稿本」 江戸時代 津市 石水博物館

「和訓栞」の稿本は、初稿本ではありませんが、再訂以降のものと考えられます。わが国最初の本格的な五十音順（あいうえお順）の国語辞典の作成に至る形成過程がわかる貴重な資料です。

No. 1 6 1

和訓栞 江戸時代 津市蔵

士清は、日本語を研究する中で、言葉の一つひとつの意味や使い方を詳しく記入し、集まった約21,000にも及ぶ言葉を整理して、辞書に作りました。これが有名な『和訓栞』で、全93巻にまとめられています。この辞書は、わが国最初の本格的な五十音順（あいうえお順）の国語辞典で、のちに日本語を勉強する人たちにとって、大変参考になりました。



クローズアップ② 津藩校有造館の督学「津坂東陽」と「斎藤拙堂」

津藩校「有造館」は、第10代藩主藤堂高允のとき、文政3年（1820）に創設されました。その設立は全国300余藩のなか115番目と早いほうではありませんでしたが、歴代の督学は「津坂東陽」や「斎藤拙堂」など著名な学者・文人がなり、全国的にも有名でした。



No. 162

聿修録 江戸時代 津市蔵

著者の津坂東陽は、津藩の儒者で津藩校有造館の初代督学です。

聿修録は、藩士の教育のため作成した藩祖藤堂高虎の事跡の書です。有造館で出版し、黄表紙と青表紙の2種類があり、展示の黄表紙は上級藩士用とされました。

No. 163

孝経發揮 江戸時代 津市蔵

儒教でとくに重視される文献の孝経について、様々な学者の解説などを研究して、自分自身の意見を加えて注釈を施したもので、津坂東陽の代表的な著書の一つです。

No. 1 6 4

旧津藩有造館之図 明治時代 津市蔵

津藩校有造館の平面図です。廃藩後多くの建物は転用されたり無くなりましたが、唯一現存する建物が現在、お城公園に移築されている、津市指定文化財の「入徳門」です。

No. 1 6 5

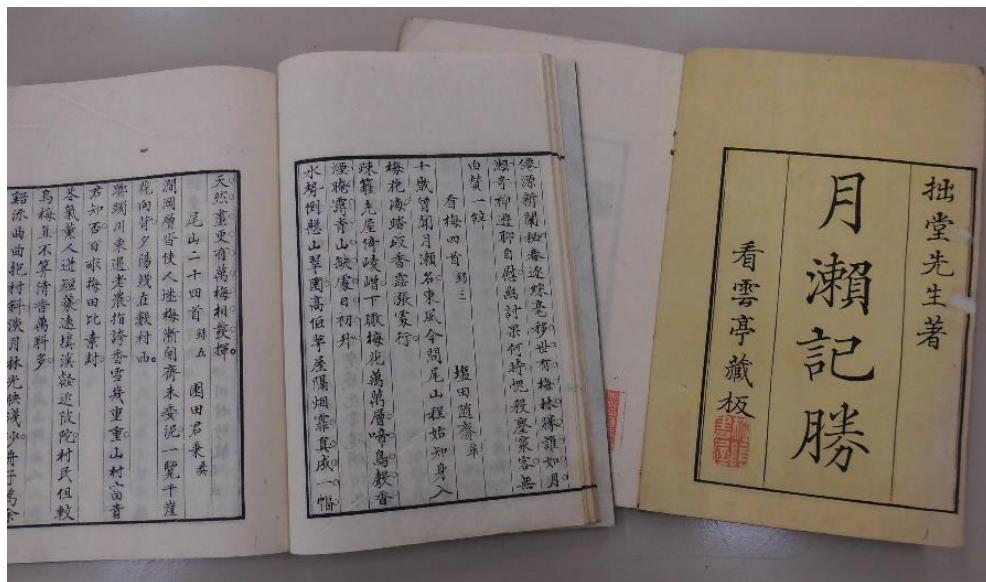
拙堂文話 江戸時代 津市蔵

著者の斎藤拙堂は、津藩の漢学者で津藩校有造館の3代督学です。拙堂の著書は多く、天保元年（1830）の「拙堂文話」16巻の刊行は、学者の間で話題となるもので、伊勢に拙堂ありと知れ渡ったといわれます。

No. 1 6 6

月瀬記勝 江戸時代 津市蔵

月ヶ瀬梅林は、奈良県にある古くからの梅林で、その光景は絶景とされよく知られていましたが、月ヶ瀬が名勝としての地位を不動にしたのは、この「月瀬記勝」刊行の影響が大きいといわれています。



クローズアップ③ 久居が生んだ医学者「橘南谿」

橘南谿（1753～1805）久居出身の医学者です。幼少の時期から学問を好んだ南谿は、19歳で京都に上って医学を学び、漢方から蘭方まで修めました。このころ日本でようやく行われていた解剖医学の正誤を確かめようと数々の解剖に参加し、近代実証医学の道を開くとともに、多くの医学書を残しました。

No. 1 6 7

橘南谿木像 江戸時代 津市蔵

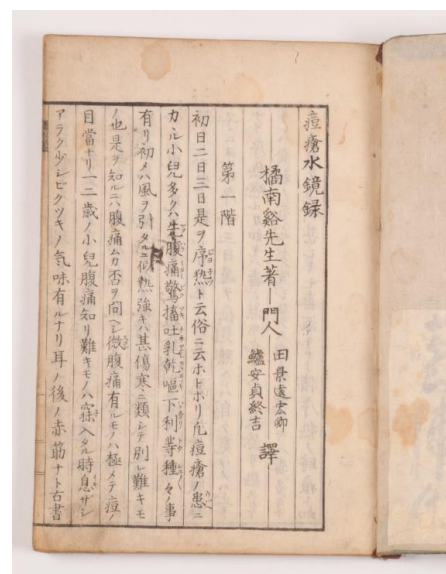
この木像は、橘南谿の風貌がわかる唯一のものです。南谿は、医師として自分のもとに治療を求めてくる病人だけでなく、広く世の人々を救うべく、医術修行で全国を駆けめぐりました。さらに文筆家としての才能にもたけ、修行で訪れた各地での体験を記した「西遊記」「東遊記」などの紀行文を残しています。



No. 1 6 8

疱瘡水鏡録 江戸 津市蔵

天明元年（1781）29歳の時に出版した医学書です。



クローズアップ④ 天文学者「稲垣定穀」と「井田理左衛門」

江戸時代、津には2人の天文学に精通した人物がいました。一人は、八町で商家を営んだ稲垣定穀（1764～1835）、もう一人は、安濃郡神戸村（神戸）の医師井田理左衛門（1791～1845）です。二人とも、家業のかたわら、様々な学問に精通し、それぞれ天文学などの研究に打ち込みました。

No.169

地球儀 江戸時代 津市蔵

稲垣定穀は、明和元年（1764）八町（八町三丁目）生まれ、江戸にも店舗を持つ「納所屋」の主人でした。商いの傍ら天文学を久居出身の医者橘南谿に学び、数学者の本多利明や測量家の伊能忠敬らとの交流もありました。

この地球儀は、稲垣定穀の子孫宅に伝わったもので、寛政6年（1794）に作られた桂川甫周の地球儀の流れをくむもので、手書きで着色が施され、また、地名なども詳細に記されています。



No. 170

天球儀 江戸時代 津市蔵

稲垣定穀の子孫宅に伝わったものです。天球儀は星座を球体に描いたものです。北極と南極を結ぶ軸で回転し、天体の出没などを理解する器具です。ただ、天空を外から見ることになるので、星座は裏返しになります。



No. 171

遠眼鏡 江戸時代 津市蔵

稲垣定穀の子孫宅に伝わったものです。桐箱に収められ「遠眼鏡」と墨書されています。天文、地理学に精通した稲垣定穀は、この遠眼鏡は必需品といえます。



No. 1 7 2

アトラス星象之図 江戸時代 津市蔵

稲垣定穀の子孫宅に伝わったものです。この図は星の位置をあらわしていて、星座が赤、黄、黒で色分けされている。中国では石申、甘徳、巫咸三家の星座は色分けされて描かれました。

No. 1 7 3 津市指定文化財

江戸時代の天文学関係資料「渾天儀」 江戸時代 津市蔵

井田理左衛門の子孫宅に伝わったものです。井田理左衛門は、寛政3年（1791）に神戸村の医者之家に生まれました。18歳の頃、医学を学ぶため京都へ行き、そこで天文学も学びました。帰京後は、医業のかたわら、天文観測にもはげみ、村人は彼を「天文さん」と呼び、屋号も「天文堂」と称しました。

渾天儀は、本来、天体の位置を測定する器具だったのが、江戸時代後期には太陽と月の動きを説明する器具として利用されたといえます。



No. 174 津市指定文化財

江戸時代の天文学関係資料「中星儀」 江戸時代 津市蔵

井田理左衛門の子孫宅に伝わったものです。円盤には細密な星座が描かれていて、中心を軸にして指針があります。真南の星座を特定することで、夜間の時刻を知ることができる道具です。



クローズアップ⑤ 鋳物師「辻家」と「阿保家」

江戸時代初期から津城下の釜屋町（北丸之内）で梵鐘、燈籠などの製造を行っていた辻家の資料と、江戸時代から大正時代にかけて、中山村（栗真中山町）で代々鋳物師を営んだ阿保家に伝来した大砲鋳造の設計図面など、津を代表する鋳物師作品や関連資料を紹介します。

No. 175 津市指定文化財

岩田橋銅製擬宝珠 江戸時代 津市蔵

津藩2代藩主藤堂高次郎のとき、架設された岩田橋の欄干に取り付けられていた銅製の擬宝珠です。本体胴部に刻まれた銘文から、寛永12年（1635）に津の鋳物師、辻吉種、重種の兄弟によって製作されたことが分かります。



No. 1 7 6 津市指定文化財

馨 江戸時代 津市 大宝院蔵

寛永5年（1628）に鋳物師辻氏によって鋳造されたものです。

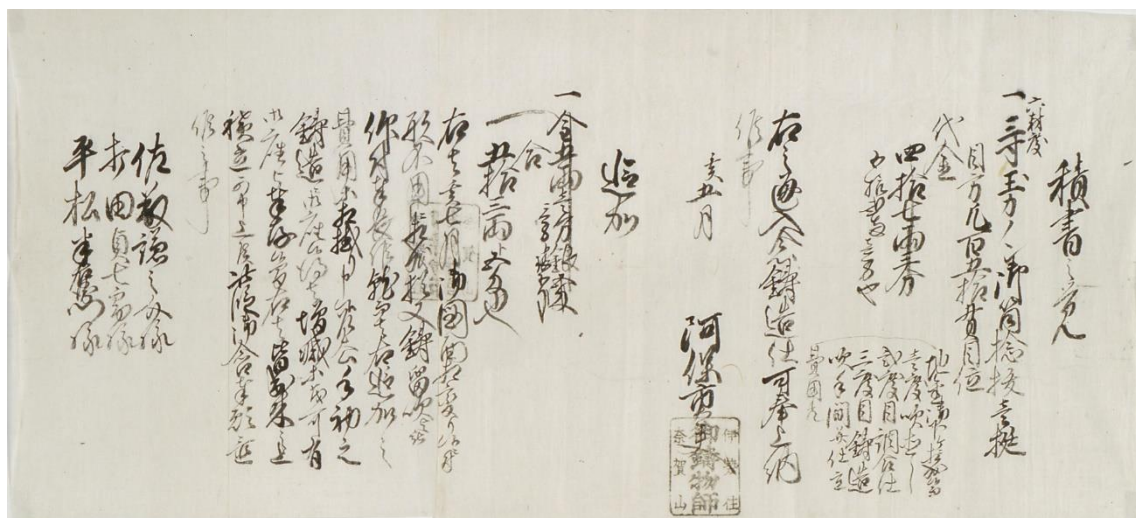
No. 1 7 7 津市指定文化財

阿保家大砲関係資料「銅製二十四封度迦農砲」 江戸時代 津市蔵

No. 1 7 8 津市指定文化財

阿保家大砲関係資料「積書之覚」 江戸時代 津市蔵

阿保家に津藩から発注された大砲の製作費用見積書の控え文書です。大砲鋳造に係る費用が、図面追加などの仕様変更によって、53両余になったことが記されています。



クローズアップ ふたつの魚籃観音立像

木造魚籃観音立像は、明治42年12月に津市で伊勢銅器製作競技会が開催されることに際して、当時の津市長内田正雄と伊勢銅器組合長の棚村房吉が鑄造用原型として高村光雲に依頼したものとされています。一方、銅製魚籃観音立像は、木造のものをもとに、2代目棚村房吉が製作したとされています。

No. 179

木造 魚籃観音立像 明治時代 津市蔵

作者の高村光雲は、明治から昭和初期に活躍した仏師、彫刻家で、江戸時代までの木彫り技術の伝統を近代につなげる重要な役割を果たした近代の彫刻界の重鎮です。

No. 180

銅製 魚籃観音立像 昭和時代 津市 妙雲寺蔵

2代目棚村房吉の作とされ、木造魚籃観音立像を津市から借り受け、制作されたものとされています。どれほど制作したかわかりませんが、現在確認できる銅製のものはこの1躯のみです。



木造 魚籃観音立像



銅製 魚籃観音立像

5 近現代

明治2年（1869）の版籍奉還、同4年に廃藩置県が行われ、同9年に三重県となり、津は城下町から県都へと姿を変えていきました。さらに明治21年に市町村制が公布され、翌22年4月1日に一斉に町村合併が行われました。この時、津市は全国30市とともに市制を施行しました。

これによって、江戸時代に200ほどあった村々が、1市2町53村、昭和の大合併で1市6町4村、平成18年に、現在の“津市”1市となっていきました。



No. 181

度会県高札 明治時代 津市蔵

No. 182

度会県高札 明治時代 津市蔵

いずれも美杉町奥津にあった高札場に掲げられていたものです。慶応四年（1868）三月十五日に太政官から出された五つの高札のうち、上段が第二札、下段は第四札です。第二札は、徒党、強訴、退散禁止が書かれ、第四札は、万国公法履行と外国人殺傷の禁止が書かれています。

No.183 三重県指定文化財

三重県行政文書「太政官日誌 三十八」 明治時代 三重県総合博物館蔵

明治4年(1871)7月、明治新政府は廃藩置県を布告しました。ここでは、旧藩名をそのまま県に改称するにとどめられました。

No.184

三重県指定文化財

三重県行政文書「太政官日誌 四拾壺」 明治時代 三重県総合博物館蔵

明治4年(1871)11月、本命の廃藩置県を断行しました。伊勢国北半分と伊賀国が安濃津県となり、伊勢国南半分と志摩国、紀伊国牟婁郡の一部を含めて度会県が成立しました。

No.185 三重県指定文化財

三重県行政文書「旧津藩城郭内絵図/安濃郡津城郭之図」 明治時代

三重県総合博物館蔵

津城内の建物は、明治12年(1879)、18年(1885)に売り払いの入札が行われました。絵図には1～13までの付箋、入札除きと書かれた付箋が貼り付けられていて、この入札に関わる図面とされます。

No.186 三重県指定文化財

三重県行政文書「久居陣営之図」 明治時代 三重県総合博物館蔵

明治5年(1872)に作成された久居藩陣屋の絵図です。赤色部分が16代藩主で知藩事の藤堂高邦の私邸、黄色部分は藩政庁を示します。



No.187 三重県指定文化財

三重県行政文書「三重県地甲号達・地乙号達」 明治時代 三重県総合博物館蔵

国の命令や県から郡長や町村の戸長などへの通知文、上申文書がまとめられています。

No. 1 8 8

市町村制例規彙纂 明治時代 三重県史編さん班蔵

明治11年(1888)11月、三重県下で市制施行を希望する四日市、津、宇治、山田のうち、知事から内務省へ上申された「津」に対して、市制施行の内定がされました。

No. 1 8 9 三重県指定文化財

三重県行政文書「安濃郡町村分合下調書類」 明治時代 三重県総合博物館蔵

明治22年(1889)安濃郡の町村合併に関する文書です。安濃村・明合村・村主村・安西村・河内村の区域、人口、戸数や沿革など三重県に提出した調書です。

No. 1 9 0 三重県指定文化財

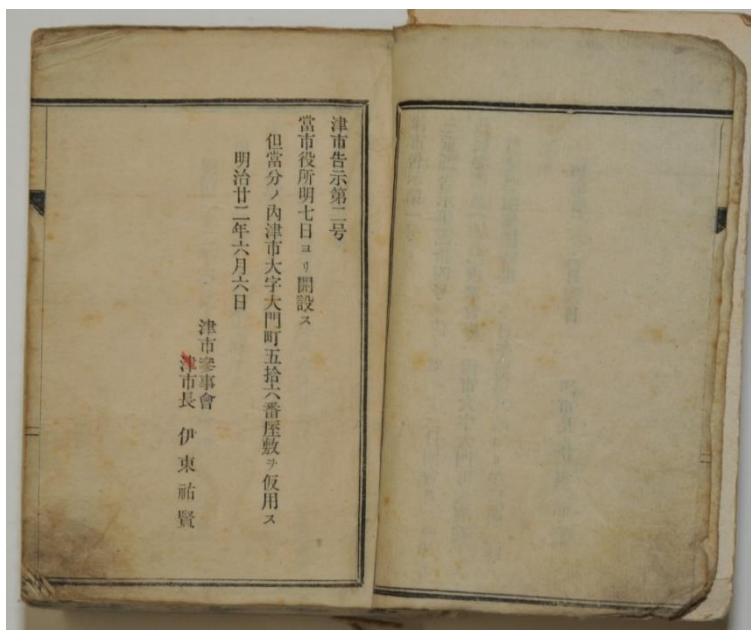
三重県行政文書「鈴鹿菴芸河曲安濃一志郡町村分合調書付録」 明治時代
三重県総合博物館蔵

明治22年(1889)鈴鹿・菴芸・河曲・安濃・一志郡の町村合併に関する文書です。現在の津市域では、菴芸郡で上野村(河芸町)ほか9村、安濃郡で塔世村(栄町)ほか17村、一志郡で久居町ほか26村の調書が収められています。

No. 1 9 1

津市告示 第2号 明治時代 津市蔵

明治22年(1889)
4月1日、「津市」が発足しました。市役所庁舎は、6月7日から津市大門町53番屋敷を借りて業務を行いました。その後、8月2日からは津市西町(北丸之内)に市役所庁舎が移りました。



No. 1 9 2

明治十九年 津市街及び近傍
実測図 明治時代 津市蔵

この図を作成した清水儀八は、旧三重県庁や三重県尋常師範学校校舎などの設計を手掛けた人物です。



明治十九年 津市街及び近傍実測図

No. 1 9 3

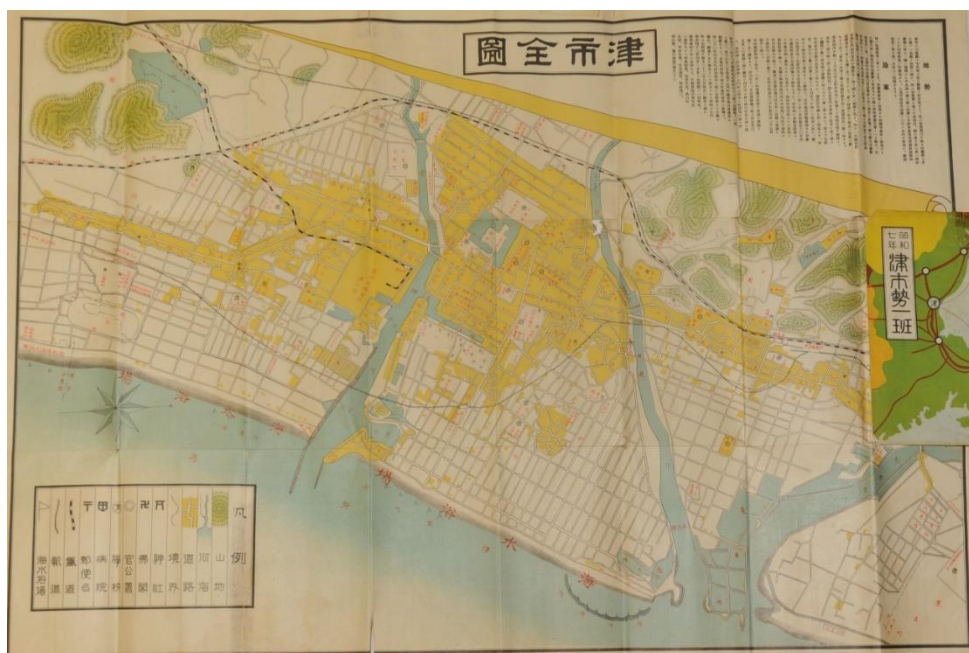
昭和六年久居町略図 昭和
時代 津市蔵

昭和6年（1931）の久居町の地図です。当時の警察や町役場、学校などの写真を載せ、主に商工業者を載せています。

No. 1 9 4

昭和七年 津市勢一班 昭和時代 津市蔵

昭和7年（1932）当時の津市の地勢、沿革などを記し津市全図とした地図を載せています。現在では見られない鉄道路線や、塔世橋と岩田橋は新旧の橋が存在していた時期です。





No. 195

昭和26年 津市 市街図 昭和時代 津市蔵

No. 196

昭和39年 津市 市街図 昭和時代 津市蔵

No. 197

鳥瞰図 伊勢電鉄御案内 昭和時代 津市蔵

昭和2年(1927)頃のものと思われ、当時は四日市～津新地間のみの営業だったため、その先の予定線は点線で描かれています。

No. 198

鳥瞰図 津市を中心とする名所鳥瞰図 昭和時代 津市蔵

昭和5年(1930)、市役所発行のパノラマ地図です。海岸部には、阿漕浦海水浴場、贅崎海水浴場、御殿場海水浴場、盾干網をはじめ、御殿場遊園地や競馬場、文化村などが描かれています。

No. 199

鳥瞰図 観光の津市 昭和時代 津市蔵

昭和12年(1937)当時の津市内の名所・旧跡や鉄道路線が描かれています。

No. 200

鳥瞰図 参宮急行電鉄沿線名所図繪 昭和時代 津市蔵

昭和5年(1930)頃のもので、現在の近鉄大阪線を中心とした沿線の名所旧跡などを載せています。

No. 201

合併協定書 平成18年 津市蔵

平成15年(2003)1月に津市・久居市・河芸町・芸濃町・美里村・安濃町・香良洲町・一志町・白山町で構成する津地区合併協議会が設立、同年4月に美杉村が加わり、10市町村による合併協議が始まり、幾多の協議、調整を経て、平成16年(2004)11月8日に10市町村で合併協定書調印式が行われました。

この合併協議で、合併期日を平成18年(2006)1月1日とすること、新市の名称を「津市」とすることなど、合併基本4項目が確認されました。

その後、構成10市町村議会での議決を受け、三重県知事への廃置分合(合併)申請を行いました。

